

## 月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

### 7-3

時の過ぎ行くままに

作詞／阿久悠 作曲／大野克夫

歌手／沢田研二

※歌詞は5番迄の内の1番と2番

あなたはすっかり つかれてしまい  
生きてることさえ いやだと泣いた  
こわれたピアノで 思い出の歌  
片手でひいては ためいきついた

時の過ぎゆくままに この身をまかせ  
男と女が ただよいながら  
墮ちてゆくのも しあわせだよと  
二人つめたい からだ合わせる

いかにも慣例的にグラスを合わせた男と女は、それぞれのカクテルに口をつけた。

二杯ともレベル以上の出来栄えだったけれど、バーテンダーの菜々緒が気転を利かしたつもりで施したレモンツイスト（1cm×2cm程度のひし形に切ったレモンの果皮を軽くひとひねりする）の微香とミクロの果皮油は、マティーニに限って言えば、飲み手の嗜好に大きくかかわってくる。

真紀好みのマティーニはベースのジンにドライベルモットを数ダッシュ混ぜるだけの処方方で、雑味のない洗練されたドライ・ジン特有の研ぎ澄まされた味わいが求められた。

真紀にしてみるとレモンツイストは邪魔であったが、角砂糖やビターズを使うシャンパン・カクテルには有効だった。

映画『カサブランカ』の主人公の経営する酒場で、主人公の恋敵ともいえる反ナチ運動の地下組織のリーダーがバーテンダーにシャンパン・カクテルを頼む場面があったり、主人公がバーボン・ウイスキーをストレートで飲む別の場面があったりするのを観ると、愛飲する酒類によって、登場人物の背景や個性を表す小道具として使っていると思われる節がある。

マティーニを飲まずにいられなかった真紀とは対照的に、仕方なくシャンパン・カクテルを飲む羽目になった横田は、本来の自分らしさを見失っていた。

真紀は接客中に極力酒を控えるようにしていたけれど、アルコールにめっぽう強い体質のせいもあって、飲み過ぎたとしても乱れることはなかった。

マティーニを飲み干した真紀は、無理をしてシャンパン・カクテルを飲んでいる男に苛立ちを覚えていた。

「終わりにしませんか」

「……」

「二人の関係です」